

令和 元年 6 月 24 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2018

課題番号：25381252

研究課題名(和文) 教員養成の修士レベル化に対応する大学院カリキュラムの開発研究

研究課題名(英文) Development of Master's Program Curriculum Contributing to Teacher Training

研究代表者

土屋 武志 (TSUCHIYA, TAKESHI)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20273302

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果の概要(和文)：本研究は、教員養成を5年以上の時間をかけることを前提とした。特に以下の3点を研究した。(1)愛知教育大学6年一貫コースのカリキュラムを開発することを通じて、教員としての資質・能力の向上につながる6年一貫教員養成プログラムの一つのモデルを提示した。(2)学部と大学院の連続性、研究的側面の強化、地域との連携、協働性の涵養を重視した大学院修士レベルにおける教育実習プログラムを構築・実施した。(3)6年一貫という枠組みを活かした教員養成モデルにより、高度な専門性と広い見識、高度な実践能力と研究能力を兼ね備えた質の高い教員の育成方法を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかとなった点は、大学の教員間の協働性である。これからの教職大学院の充実に向けて、真に求められているのは、異なる専門性、異なる分野、異なる経験を持つ大学教員による協働性である。6年一貫教員養成コースの第1の特徴として、異学年異分野の学生や院生による協働的な学びがあげられるが、それを支えているのは、異なる専門性、異なる分野、異なる経験を持つ大学教員による協働性である。さらには、学生や院生と大学教員との協働性である。まさに、異なる年齢層、異なる専門性、異なる分野、異なる経験を有した人たちの集まりにおいてこそ、新たな発見や発想が生まれ、創造的な学びが生み出される。

研究成果の概要(英文)：Based on the assumption that teacher training requires five years or more, this research specifically studied the following three points. (1) Through the development of the curriculum for Aichi University of Education six-year course, we presented a model of the 6-year integrated teacher training program which leads to the improvement of abilities required to be a good teacher. (2) We created and implemented a teaching practicum program at the master's program level with emphasis on the continuity between the undergraduate and graduate curricula, academic aspects, regional partnerships, and collaboration with others. (3) By means of a teacher training model that utilizes the six-year framework, we considered what we should do to develop teachers with high expertise, broad insight, high practical ability and research ability.

研究分野：教科教育学

キーワード：6年一貫教員養成 大学院カリキュラム 教員養成

1. 研究開始当初の背景

2009年8月の衆議院総選挙で民主党が与党となり、マニフェストの一つである6年制教員養成(教員養成の修士レベル化)の本格的な検討が始まった。以来、中央教育審議会をはじめ、教育研究者や学校教育関係者等により、それぞれの立場や経験から活発に議論され(佐久間 2009 他)、実現に向かうかに思われた。その中で着想されたのが本研究である。

その後、2017年8月に出された「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて - 国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書 - 」において、教員養成の大学院は、原則、教職大学院に一本化することが明確に打ち出されたのである。では、本研究はその意味までも失ってしまったのかというと、本研究グループではそうは考えなかった。むしろ、この状況だからこそ、本研究には意義があると考えた。

2. 研究の目的

教員養成において修士課程や教科専門の教育内容の重要性が認められていながら、うまく機能してこなかったが^{*1}、修士課程をベースに教員養成プログラムを再検討することは、教員養成の高度化の議論に寄与すると考えた。また、今後、組織名称としては「教職大学院」になるとしても、本研究で目指す高度化、大学院プログラムは、その中身において貢献するものであると考えた。有識者会議報告書でも指摘されているように、これからの教員にとっては、教科等に関する深い学びは一層重要性を持つ。先にも述べたように、問題は、「教科に関する深い学問的な知識・理解」をいかに有意義に教員養成と結びつけるかであり、その点はこれまでも、また、これからも教員養成の大きな課題の一つである。

3. 研究の方法

本研究は当初の研究期間を1年延長し、2013年度から2018年度までの6年間とし、概ね以下のような年次進行を進めた。

2013年度 教員養成6年制に関する文献調査

2014年度 カリキュラム検証調査(1)、シンポジウム(1)^{*2}、
研究の中間総括^{*3}

2015-16年度 カリキュラム検証調査(2)、シンポジウム(2)^{*4}

2017年度 カリキュラム検証調査(3)、シンポジウム(3)^{*5}

*1 このような問題はこれまで教員養成関係者で広く共有されてきた問題である。それを乗り越えるための試みとして、「教科学」や「教科内容学」のような学問領域の創設が提唱された。「教科学」は、2012年に設立された愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻(博士課程)での教育・研究の柱の一つになっている。また、「教科内容学」については、2015年に日本教科内容学会が設立され、研究や交流が行われている。なお、蛇穴(2018)は、この問題がなかなか解消されない原因の一端が教科専門の担当者の意識にある可能性をデータとともに論じている。

*2 2015年3月14日にウィルあいち(愛知県女性総合センター)にて開催された「教員養成の高度化を目指した6年教員養成コースの成果と課題」(愛知教育大学・京都教育大学共同開催)。主な参加者は、京都教育大学6年制コース教員・学生と愛知教育大学6年一貫コース教員・学生・修了生。

*3詳細は小塚他編(2015)を参照。

*4 2016年6月17日に愛知教育大学にて開催された「教員になる前に何を学びたいか、何を学ぶべきか。自分にとって大学院は必要か」。主な参加者は、柳澤好治文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長(当時)、愛知教育大学6年一貫コース教員・学生、その他の愛知教育大学学生。

*5 2018年2月24日にウィンクあいちにて開催された「『教員養成の修士レベル化に対応する大学院

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

2018年度 研究の総括(報告書)*6

本研究では、特に以下の3点を研究の目的とした。

- (1) 愛知教育大学 6 年一貫コースのカリキュラムを開発することを通じて、教員としての資質・能力の向上につながる 6 年一貫教員養成プログラムの一つのモデルを提示する
- (2) 学部と大学院の連続性、研究的側面の強化、地域との連携、協働性の涵養を重視した大学院修士レベルにおける教育実習プログラムを構築・実施する
- (3) 6 年一貫という枠組みを活かした教員養成モデルにより、高度な専門性と広い見識、高度な実践能力と研究能力を兼ね備えた質の高い教員の育成方法を検討する

4. 研究成果

(1) 概要

愛知教育大学 6 年一貫教員養成コース(以下、6 年一貫コース)では、通常のカリキュラムとは別にコース独自のカリキュラムをコース生に実施してきたが、上記のような修士課程の状況に鑑み、設置当初から大学院段階での実習を重視してきた。特に、本研究で研究対象とする 2013 年度以降のカリキュラムは、教員養成の高度化や大学院での効果的な実践的科目の実施を意識した内容となっている。そのカリキュラムは以下のような特色を持つ。

- a. 学部・大学院の連続性の重視
- b. 実習の高度化(研究的側面の強化)
- c. 地域性の重視
- d. 高度な協働性の涵養

以上の特質を持ったカリキュラムを通じて、以下のような教員を育成することを目指す。

ジェネラリストかつスペシャリスト:多角的に、また多様な場での経験を通して教育を考えることで自己の教育観を深め、幅広い対応力を身につけるとともに、自己の専門領域に対する見識を深めることを可能にする。

研究者かつ教育者:研究者と教育者は別物とする考えが学校教育の現場には少なくない。しかし、学校教員は、教材研究を始め、常に新たな課題、問題が生じるため、絶えず、追究、考察、開発といった研究活動と、それに耐えうる自己であり続けるための高い自己育成能力が必要とされる。換言すれば、以下の5つの特質を持つ教員である。

1. 専門領域に関する高い専門性を持つ。
2. 多角的に教育を考え、自己の教育観を深める。
3. 幅広い対応力を持ち、地域や同僚と協働する。
4. 常に新たな課題に挑戦し、自己を育成する。
5. 長期的に教育の改善に取り組む高い研究力を持つ。

(2) カリキュラムの具体

学部3年次から6年一貫コースのカリキュラムは始まる。以下、授業タイトルを示す。

カリキュラムの開発研究『成果報告会と教員養成の高度化に関するラウンドテーブル』。主な参加者は、柳澤好治教員養成企画室長(当時)、教育委員会、小中高等学校、大学、企業の教育関係者、京都教育大学6年制コース教員・学生、愛知教育大学6年一貫コース教員・学生・修了生。

*6 2017年度までの予定だったが、研究期間を一年延長した。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19(共通)

表1 愛知教育大学 6 年一貫コースの授業題目

学年	必修科目				選択科目	
B3	課題実習	課題実習ゼミナール		教材開発 研究	海外教育 研究	
		課題実習ゼミナール				
B4	テーマ実習	テーマ実習ゼミナール		教材開発 研究	海外教育 研究	
		テーマ実習ゼミナール				
	教育学研究科		教育実践研究科			
M1	研究実習	研究実習 ゼミナール	学級経営 研究実習	学級経営 ゼミナール	教材開発 研究	海外教育 研究
		研究実習 ゼミナール		教師力向上研 究		
M2	教育研究	教育研究 ゼミナール	授業 研究実習	授業研究 ゼミナール	教材開発 研究	海外教育 研究
		教育研究 ゼミナール		教師力向上研 究		

本研究では、修士課程に進んだ場合のカリキュラムに焦点を当てる。その詳細は、以下に示した通りである。

表2 愛知教育大学 6 年一貫教員養成コースカリキュラム(修士課程に進んだ場合)

授業名	配当学年	概要
課題実習	B3(必修)	附属学校・連携校での授業研究会に参加
課題実習ゼミナールⅠ・Ⅱ	B3(必修)	自身の教育課題を探る
テーマ実習	B4(必修)	M1での研究実習の希望校での学校観察
テーマ実習ゼミナールⅠ・Ⅱ	B4(必修)	自身の教育課題を深める
研究実習	M1(必修)	選択した連携校での週一日程度の実習
研究実習ゼミナールⅠ・Ⅱ	M1(必修)	各自の実習の振り返り、実習を踏まえた発展学習
教育研究	M2(必修)	M1までの学びを総合して、シンポを企画・開催
教育研究ゼミナールⅠ・Ⅱ	M2(必修)	研究実習を基に教育論文作成。上記シンポの準備
海外教育研究 ~	B3 ~ M2(選択)	海外の教育の現状の研究。日本との比較研究
教材開発研究 ~	B3 ~ M2(選択)	教材開発に重点を置いた研究。佐久島中学校で実践

必修科目について説明すると、表2に示したように、6年一貫コースでは、学部3年から知識・経験・関心・意識を積み重ねて大学院の実習に臨む。その準備として、まず学部3年次の「課題実習」「課題実習ゼミナール」において、教育の現代的課題を学ぶとともに、連携校で実習を行う上級生の姿を見て、自身の実習のイメージを明確にする。学部4年次には、一歩進んで、自身の実習における研究テーマを検討する準備として「テーマ実習」「テーマ実習ゼミナール」を設け、3年次より深く、また、焦点を絞

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19(共通)

った教育の現代的課題の学修を行うとともに、自身が興味を持った連携校で上級生の実習を観察する。

以上の学びの総括として、「教育研究」と「教育研究ゼミナール」という二つの授業で、受講者が関心を持つ教育に関わる話題に関するシンポジウムを企画・開催するとともに、前年度に作成したレポートを基に、教育実践論文を作成し、6年一貫コースの交流誌『6一論叢』に投稿する。

(3) 課題

新しい教職大学院の充実に向けて、本研究によって明らかになった最大の課題は、大学の教員間の協働性である。大学の教員間では、これまでも、共同研究は分野を問わず行われてきた。しかし、これからの教職大学院の充実に向けて、真に求められているのは、異なる専門性、異なる分野、異なる経験を持つ大学教員による協働性である。6年一貫教員養成コースの第1の特徴として、異学年異分野の学生や院生による協働的な学びがあげられるが、それを支えているのは、異なる専門性、異なる分野、異なる経験を持つ大学教員による協働性である。さらには、学生や院生と大学教員との協働性である。まさに、異なる年齢層、異なる専門性、異なる分野、異なる経験を有した人たちの集まりにおいてこそ、新たな発見や発想が生まれ、創造的な学びが生み出される。今後の教職大学院の充実のためには、何よりもまず、大学教員間の協働性を高める仕組みづくりが不可欠といえよう。そして何よりも、大学教員の協働性こそが、これまで大学教員自らが、反省的に問うてこなかった課題である。今後、魅力ある教職大学院が実現できるかどうかは、まさに、この一点にかかっている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

小塚良孝, 二つのシンポ, 6一論叢, 査読無, 5巻, 2017, 54 - 55

江島徹郎, 6年一貫教員養成コース7期生主催シンポジウム「困っている子どものために何ができませんか?」は、どのような学びを構築するか, 6一論叢, 査読無, 4巻, 2016, 70 - 75

真島聖子, 子どものニーズを捉えた教材開発研究 2015 の成果と課題, 6一論叢, 査読無, 4巻, 2016, 90 - 94

[学会発表](計3件)

小塚良孝, 愛知教育大学 6年一貫教員養成コース「研究実習」について - 修士課程における実習の高度化を目指した取り組みの成果と課題, 2017年度日本教育大学協会研究集会, 2017

真島聖子, 愛知教育大学 6年一貫教員養成コース「教材開発研究」について - 教材研究に焦点を当てた実践的科目の成果と課題, 2017年度日本教育大学協会研究集会, 2017

真島聖子, Higher-level Teacher training and the 6-year Combined teacher training course, 第10回東アジア教員養成国際シンポジウム, 2015

[図書](計2件)

小塚良孝, 土屋武志, 真島聖子他, 愛知教育大学, 教員養成の修士レベル科に対応する大学院カリキュラムの開発研究, 2019, 125

小塚良孝, 土屋武志, 真島聖子他, 愛知教育大学, 教員養成の修士レベル科に対応する大学院カリキュラムの開発研究, 2015, 91

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 江島 徹郎

ローマ字氏名: EJIMA TETSURO

所属研究機関名: 愛知教育大学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

部局名:教育学部

職名:教授

研究者番号:10335078

研究分担者氏名:真島 聖子

ローマ字氏名:MAJIMA KIYOKO

所属研究機関名:愛知教育大学

部局名:教育学部

職名:准教授

研究者番号:10552896

研究分担者氏名:松原 信継

ローマ字氏名:MATSUBARA NOBUTUGU

所属研究機関名:愛知教育大学

部局名:教育学部

職名:教授

研究者番号:30593545

研究分担者氏名:小塚 良孝

ローマ字氏名:KODUKA YOSHITAKA

所属研究機関名:愛知教育大学

部局名:教育学部

職名:准教授

研究者番号:40513982

研究分担者氏名:中田 敏夫

ローマ字氏名:NAKADA TOSHIO

所属研究機関名:愛知教育大学

部局名:教育学部

職名:理事

研究者番号:60145646

研究分担者氏名:吉岡 恒生

ローマ字氏名:YOSHIOKA TSUNEO

所属研究機関名:愛知教育大学

部局名:教育学部

職名:教授

研究者番号:90252303

研究分担者氏名:中野 真志

ローマ字氏名:NAKANO SHINJI

所属研究機関名:愛知教育大学

部局名:教育学部

職名:教授

90314062

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。